

# 優作の優

岩城裕明

Illustration  
スオウ

## 1

どうやら、初めに言葉があったらしい。  
 んで、言葉は神と共にあったそうだ。  
 いやもう、言葉は神だった。

昔々、ヨハネさんがそう言ったそうよ。

何よりもまず、僕は聖書のことでもキリスト教のこともほとんど何も知りません、と早々と逃げを打っておく。この文章だつてどこから拾って来た物やら、アマゾンから品物が届いて、印鑑を探していたら、不意に引きだしから出てきて驚く。

「すいませーん」玄関から宅配業者さんの声が聞こえる。「無ければサインでも構いませんよ」

まるで出来の悪い子に情けをかけるような優しい声だった。

ここでサインをしては負けである。

僕は無視して更に引きだしを開けた。  
 すると先程の文章の続きが出てきた。何故に？

この言葉は、初めに神と共にあったね。

万物は言葉によって成ったよ。

成ったもので言葉によらずに成ったものは、  
 ひとつもなかったてさ。

再三言うようだが、僕は聖書やキリスト教に明るくない。無料で頂ける聖書をパラパラと読む程度だ。それでも気になった文章が頭に引っ掛かっていることがあって、それが時々、何の気なしに、とても大雑把に、ゴボ天のゴボウな感じで、一口噛んだと思つたらズルズルと出てきてしまうのである。他意はないし、悪意もない。

でもどうやら、神様は言葉で、更に全てが言葉なのだそうだ。

ちなみに、僕の幼なじみに沢優作さわゆうさくという男がいる。

彼は掛け値なしに、言葉だった。名は体を表すという言葉を体で表すような男だった。つまり、優作の『優』は『優しい』の『優』である、ということである。わかるだろうか？

彼は所謂『いい人』という言葉そのものであり、もつと言えばイエス・キリストの生まれ変わりのような、完全無欠の博愛主義者なのである。あ。印鑑が見つかった。ヨハネの福音書の下の引きだしにあった。でも、それは思いつきり実印で、同じ引きだしに朱肉は無かった。

なので、結局サインで荷物を受け取ることにした。無然とした表情でペンを差し出す宅配業者さん。僕は限りなく印鑑に似たサインを書いてあげた。

そんなことをしていると、どういうわけか僕は誰かに沢優作という男の話をしたくなっていた。したくてしたくて堪らなくなっていた。何故だろう？

ヨハネの福音書から連想したからだろうか？ そう疑問に思う頃には僕は既に帰ろうとしていた宅配業

者さんを「すいません」と呼び止めていた。

「あのですね。僕の幼なじみに優作って奴がいるんですが、彼はとてもトリッキーな男でね。で、その優作の話、聞いてもらえますか？」

僕は今日、初めて出会った彼にそう持ちかけてみた。

すると、彼は眉間に皺を寄せて、言った。

「ああ？」そして怪訝な顔をしながら「いや、いいです」と言っつて首をひねり、彼は帰って行った。

ふむ。

僕は一人嘆息して家の中へと戻る。アマゾンから届いた箱をソファの上に放り投げ、そのまま自分もソファへ腰を下ろした。

仕方がない、一人で話すことにしよう。

ああ、でも誤解の無きよう言っておく。別に、誰も好き好んで優作の話をするわけではない。ほら、ゴボ天のゴボウが抜けたとして、わざわざ穴へと戻す奴がいるだろうか？ そのまま食べるだろ？ ま

あ、そういうことである。

## 2

初めに、僕が優作と出会ったのがいつどの場面だったかはおぼえていないけれど、小学校低学年の時に出会っていたことは間違いない。当時、優作と僕はクラスこそ違ったが、隣のクラスに母子家庭でかつ根暗でかつ友達が一人もないという僕と全く同じ境遇の気持ち悪い奴がいるらしい、と存在自体は知っていた。しかしそこは内気同士、気になるからと言って自分から動くことなどはせず、ただじつと個人活動に勤しんでいた。

しかしこれまた心弱い者同士、個人活動をする場所は限定されていて、校庭や公園などといった強者が集う場所ではなく、河のほとりや、河のほとりや、河のほとりしか無かった。だから、僕らはいつの間にか出会い、一緒に遊ぶようになっていた。そして、

五年生の時に初めて同じクラスになり、お互いの家に遊びに行くような、毎日一緒に帰るような、そんな間柄になっていた。

優作は常に笑っている少年だった。常にである。

例えば、優作が小便中に「優作くん？」と僕が言っても、振り返る彼は笑顔だった。また授業中に後ろから「優作くん？」と僕が言っても、振り返る優作は笑顔で、先生に怒られ立たされている優作に小声で「優作くん？」と僕が言っても、振り返る彼はやっぱり笑顔だった。そして、その笑顔の後頭部に教科書が振り下ろされるのを見て、僕も笑った。

優作の笑顔はちよつと独特で、他の子供がやるような口が裂けんばかりに広げて笑うような、快活なそれではなく、ただ、アヒルのように口の端を微妙に丸めて、その頬の動きに合わせるように眼鏡の奥の目尻を少し緩ませるだけ。そうやって微かに笑うのだ。そして自分からは何もしない。相手が何か言いつ出すのを待って、それから「うん、いいよ」とそ

の全てを受け入れるのである。それが優作の全てだった。それ以外の優作の姿を僕は見たことがなかった。

「今日一緒に、帰ろうよ」僕は言う。

「いいよ」優作は言う。

「そのバツタ、トノサマじゃね？ 交換して」僕は言う。

「うん、いいよ」優作は言う。

「帰りに本屋に寄っていい？」僕は言う。

「別にいいよ」優作は言う。

「ごめん、昨日の宿題見せてくれない？」僕は言う。

「全然いいよ」優作は言う。

「ちょっと、いいよって二回言ってみて」僕は言う。

「いいよ、いいよいいよ」優作は言う。

アホである。

それらの「いいよ」を優作の口から何度聞いただろうか。レモン千個分のビタミンCという表記はレモンの価値を下げたが、優作の「いいよ」を東京ド

ーム何杯分かで表すことで、東京ドームの価値が下がることも間違いないだろう。もう東京ドームで「いいよ」の湯浴びが出来る勢いである。

小学生の僕が見ても優作は明らかに優しい男だった。いい奴だった。もっと言えば都合のいい奴だった。そしてそれは友達の僕に対してだけでなく、クラスメイトみんなに対しても同じで、結果、彼は先生にバレるまで飼育係と水やり係と保健係と図書係と掃除係と新聞係と書記係を兼任することとなった。優作が何でも「いいよ」と言うから、みんな凶に乗ったのだ。恥ずかしながら僕も乗った。いつの間にか内向的だった性格が、優作の優しさに付け入ることによって少し明るくなり、優作以外にもしゃべる友達が増えていった。それに比べて、優作本人は何も変わらなかった。「いいよ」と言う以外は、ほとんどしゃべらず、僕以外の生徒といる時は何かしら頼み事をされているようだった。

そんなある日。

僕は優作の家で当時空前の人気を有していたスーパーファミコンのマリオカートをしていた。二人で肘を振り回しながらゴリラやカメやヒゲを走らせて、とても楽しかった。いや、楽しすぎた。興奮した僕は深い考えもなく言ってしまった。

「優作？」

「なに？」

「これさ、くんない？」

僕はすぐに自分が言ってしまったことの重大さに気がついた。

「いいよ」

案の定、優作は平然と言いやがった。

僕は慌てて「いや！ 冗談だよ！」と言いい繕い、必死に冗談であったことをアピールするように「はははは」と無理矢理笑った。

「え、何が？」優作には伝わらなかつた。「いいよ、あげるよ」そう言ってスーパーファミコンからガシ

ヤコンとマリオカートを切り離し、僕の胸へと押しつけてきた。

僕はその四角いソフトを受け取ることも振り払うことも出来ずに固まってしまった。駄菓子や、文房具ならいざ知らず、今回はゲームソフトである。それは誕生日やクリスマス一回分、家庭によっては複合技を駆使せねば手に入らぬ物なのである。

コイツ、え、マジか？ と優作を見た。

優作はいつも以上に満面の笑みだった。マジだった。

僕はスクツと立ちあがり「今日は、帰るわ」と言った。

「え、いきなり？」優作は驚きながらも僕に合わせるように立ち上がる。よって胸のマリオカートも付いてきた。「じゃあ、これ持って帰ってよ」

「あ、ごめん、よく考えたら、僕、スーパーファミコン、持ってないや」

僕は嘘までついて、ようやくマリオカートを押し

のけた。なのに優作ときたら！

「じゃあ、スーパーフアミコンも一緒に……」

「じゃあ帰るから！」

慌てて遮った。

それでもしつこく優作はついてきて、

「あ、アレだったら、プレゼント包装しようか？」

と言う。

なんでやねん。

僕は玄関から逃げるように出ていった。

マリオカートに興奮はとつくの昔に消え去っており、僕は半袖から飛び出した両腕を擦り合わせていた。いつの間にか、体が震えていた。たぶん、僕が優作の『優しさ』の中にある『異常さ』に初めて気がついたのは、この瞬間だったのではないかと思う。

そして次の日。

郵便受けの中に綺麗にラッピングされたマリオカートが入っていた。僕はもう何も言わなかった。そのマリオカートは、今でも引きだしはどこかで眠っ

ているはずである。

### 3

中学生になると僕らはまた違うクラスになる。

すると一緒に帰ることも遊ぶことも無くなり、すっかり疎遠になっていた。基本的に受け身である優作は僕の方から行動しなければ交際はいとも簡単に断つことが出来るのだ。

とはいえ、優作のことは何故か気にかかった。だから彼のクラスに女友達を作って、休み時間になるとそれとなく様子を見に行くようにしていた。

優作は、僕のように彼の異常性に気付くことなく、凶に乗り続けている男友達と行動を共にしており、微笑む優作を中心に小学生からの同級生である水島と波佐間という馬鹿が二人と、そして名前も知らない馬鹿が二人、計四人の馬鹿が周りを囲んでニヤニヤと笑っているという、端から見ると和やかな雰囲気

気に見えなくなかったが、まあ、完全に虐められているようだった。優作はいきなりヘッドロックをされ、その後、四人に尻を蹴られながら、急ぎ立てられるように教室から出て行く。

「ね、どこ見てるの？」

女友達と言った。僕の顔の前で手をフリフリと揺らし注意を引こうとしているようだが、僕は「別に」と言いながら、その手をどけた。

僕は開かれた扉に優作の残滓を見ながら聞いた。

「休み時間も終わろうとしているのに、彼はどこに行っただのかな？」

「さあ」女はつまらなさそうに口を尖らせて言う。

「またパシリじゃないの」

ふむ。

僕は立ち上がって、教室から出て行った。

まあ、別に少々虐められているからといって、どうってことは無いだろう。何故なら見ている限り優作のスタンスは何も変わっていないからだ。それを

周りが利用しているだけで、今も、たぶん水島あたり「焼きそばパン、ダッシュユナ」とかなんとか言われて「いいよ」と返したただけだろう。ただ、それだけに虐めがエスカレートしていくことは目に見えて明らかで、案の定、二年生になると優作はプールの時間を休むようになってしまった。肌を見せられない事情を背負うようになったのだ。

その頃の僕はというと、思い立ったようにボクシングを習い始めていた。

黄色に赤い文字というラーメン屋のような電飾だらけの立て看板に、テレビデオを無理矢理載せて宣伝ビデオを流し続けるという頭の悪そうなジムだった。僕はそこに週三日のペースで通い、そのジムの月謝の為に毎朝新聞配達をしていた。それと同時に何故か優作も新聞配達を始めており、配達途中に顔を合わせるようになった。あの友達もどき共に貸す為のお金が小遣いでは賄えなくなったので、新聞配達を始めたのだそうだ。そう真面目な顔で言う彼



を見て僕はどう反応したのか困ってしまった。ただ、僕が「この新聞もついでに配ってくれ」と言えば、彼は迷うことなく「いいよ」と言うのだろうなと思つた。

とはいえ、毎朝、汗をかきながら新聞を配る優作を見て、まあ、元氣そうだし、虐めと言つても命が取られるわけでもないし、と静観していた。

そして中学三年になると、僕と優作はまた同じクラスになった。水島達とも同じクラスだった。

ある日の昼休み。

「はいはい」と水島が大声を出してみんなの注目を引いていた。「優作くんが、この度、絞首刑に決定しましたー」

そう言いながらぴよんぴよんと飛び跳ねている。

「はい、こんなありませんけど」波佐間がナイロンの紐ひもをかかげながら、同じくぴよんぴよんと飛び跳ねていた。

「おお、波佐間くん、ナイス」

四人は天井からぶら下がる蛍光灯にその紐を引っかけ、輪っかを作りだした。

その光景を優作はいつものように微笑みながら見ている。それどころか水島に「あ、ここ持ってた」と手伝わされていた。何がどうなつて、絞首刑になるのかはわからないけれど、これは、流石さすがにまじいだろう、そう思った僕は靴からジムで使う予定だったバンデージを取り出して、拳にクルクルと巻きだした。

その間にも絞首刑の準備は着々と進んでいて、優作は縦にふたつ重ねた椅子の上に立たされており、倒れないようにナイロンの輪っかを掴んでバランスをとっていた。それでも僕は慌たふてず、弛たるみが出来ないようにきつくバンデージを巻き続けた。

優作の首は半ば輪っかの中に入っており、輪っかを必死に掴む指は真っ白だった。足下は足場を固めようとすする度に椅子がグラグラと揺れていた。

僕はようやく出来上がった拳を握りしめた。それは満足な堅さで、僕は「よし」と一人頷いた。いつの間にか優作の周りでは「死ね死ね」コールが巻き起こっていて、水島達が大きく手拍子をしながら涎を垂らして笑っていた。僕は立ち上がり、彼らにゆつくりと近づいていった。

まず水島が僕に気がついた。半笑いのまま「何？」と僕を見る。

僕は無言で拳を上げ、ファイティングポーズをとった。

それを見た水島が吹き出した。「え、何？」

僕はスッと一步踏み出し、えい、とまず左拳を彼の鼻先にちよんと当てた。

すると「え？」と水島の笑顔が消えて、プラスチックみたいな無表情が残った。

僕は腰をひねり、えいや、と今度は彼の顎めがけて右拳をねじ込んだ。人差し指から小指までをニユルリと滑らすように、水島の顎に這わせていった。

ジン！ と完璧な手応えが肩にまで響く。それを感じた僕は彼が膝からくずおれるのを確認するまでもなく振り返り、すぐに他の三人に向かつていった。

そしてその三人も、はい、はい、はいはい、とテンポ良く潰してしまった。凄い。僕は自分で自分に驚いていた。不良と呼ばれる人種を数秒で沈めてしまった。ジム恐るべし。というか僕恐るべし。

周りを見ると、みんな静まりかえっていた。

まあ、別に歓声を期待していた訳じゃないけれど、ふむ。

僕は優作を見上げた。

彼は笑顔のまま綺麗に首を吊っていた。

どうやら僕が暴れた際に椅子が倒れてしまったらしい。僕は急いで彼の足の下に肩を入れて、支える。でもその前に重さに耐えられなかったのか蛍光灯を吊っていた金具が外れ、天井から落ちこちてきた。

蛍光灯が割れ、ようやく悲鳴が上がる。騒ぎが大きくなる前に僕は咳き込む優作を引き連れて、教室

から逃げ出した。

僕は血の付いたバンデージをほどきながら、無言で優作を河のほとりまで引っぱって行き、投げ飛ばすように座らせて、言ってやった。

「あのさ、いい人でいるのもいいけどさ。自分で出来ることと出来ないことぐらひは考えろよ」更に続ける。「あのな、いい人と都合のいい人は違うからな」

確実に胸を打つことを言ってやった。

すると優作は「うん」と頷き「わかった。ありがとう」と言っているものように笑った。

そして、優作はそれでも何一つとして変わらなかつた。

あの絞首刑事件は一種の臨界点のはずで、あの後、水島達も心の中では「やりすぎた」と反省していたはずだった。それなのに、その後も相も変わらず奉仕しようとする優作の姿を目の当たりにして、ようやく水島達も気がついた。コイツは頭がおかしいと。

それからというもの大げさな虐めは無くなった。変わったことと言えばあれ以来、僕の人氣が急上昇したことぐらいである。

そんな中学時代を経て、僕らは無事に高校生になった。

みんなの宿題を一手に引き受けていた優作は言うに及ばず、僕も案外頭は良くって、二人揃って上品な高校へ進学することが出来た。そこでは穏やかに柔らかなマシユマロのような人達しか生息しておらず、誰も優作に無理な頼み事などしなかった。よって高校三年間は何だか物足りないほど平穏な学校生活となった。

その頃になると僕は優作の無尽蔵とも思える『優しさ』に、いつの間にかいくつかのルールが出来上がっていることに気がついた。それは彼が頼み事を断るといふ場面に、この年になって初めて出くわすようになり、あらためて詳しく彼を観察した結果、ようやく見えてきたものだった。とはいえ、そのル

ールといっても、それは制約というよりもいたって当然のことであったが、とりあえず書き出してみる。

〈沢優作のルール〉

一つ、全ては先着優先である。

これは例えば、「体操服を貸してくれ」という頼み事に対しては、優作が体操服を一着しか持っていない限りにおいて、先着一名様限りであるということである。つまりそれ以降は、驚くべきことだが、優作の口より「ごめんね」という言葉が聞けるのだ。ただし、「後藤くんから体操服を借りられないか聞いてきてくれない？」ならばその後でも実行してくれるだろうが、後藤くんが貸してくれるかどうかはもちろんわからない。

また、相反する頼み事をされた場合も先着順である。

例えば、「坂井くんと喧嘩をしてくれ」と頼まれ

た後に、「坂井くんと喧嘩しないでくれ」と言われても優作は断るのだ。ただし「坂井くんを勝たせてあげてくれ」や「坂井くんには出さないでくれ」という頼みなら可能である。やはり出来る限り頼み事を聞こうという姿勢に変わりはない。

一つ、頼み事は言葉の通りに受け取る。

これは例えば、先程の「坂井くんには出さないでくれ」で言うならば、足を出す可能性はあるということである。

また、これは先の話になるのだが、大学時代の優作の伝説として、ある講義の出席の代返を三十人分も引き受けてしまったということがあった。その時はもちろん先生にバレてしまったが、しかしこれは誰も優作に「バレないように」と頼まなかったからである。もし誰かが「代返お願い、バレないようにね」と言っていれば、優作の自己判断により、三十

人分も引き受けずに四、五人で打ち切っていたはずなのだ。

一つ、頼み事は努力で可能な限りは受けるが、他は断る。

もうこれこそ言うに及ばず当たり前のことなので、優作と付き合っているとその当たり前すらも見失いそうになるから、時々は思い出さなくてはいい。これは例えば「明日までに十キロ痩せてよ」と言われれば彼は断るだろうが「一カ月」と言われれば受けるだろうということである。いや、でも、優作ならば腕や足の一本ぐらい切り落としかねないので、一日で十キロ痩せてしまうかも知れない。それはもう優作の「痩せる」という言葉の定義によるものなので言ってみないとわからない、が、恐ろしくて言えたものではない。

以上である。このようにルールがわかってしまったら、優作の不気味さは消え、彼ほどわかりやすい奴もいないと思える。優作に対する恐怖というのは、結局、自分が言葉を間違えた場合のことであり、それでも彼がそれを実行してしまうという恐怖なのだ。つまり、既に言ってしまったことは取り消せない。

それを痛感するはめになったのは、水島達だった。高校生になり誰にも虐められなくなった優作は、暇になった。そして暇になった彼が何を始めたかという、中学時代に貸したお金を取り立て始めたのだ。

もちろんのこと、優作にはカツアゲをされていたという認識は無かった。なぜなら彼は「貸して」と言われたので「いいよ」と貸しただけなのだ。そして貸した物は返さないといけない。彼はみんなに催促の電話をした。

「あ、水島くんですか？ 沢ですけど、あの、もしかして忘れてるといけないから、お電話したので

すが、○月×日に、ウン千円、貸しているのだけど、  
あと他にも……」

「口調は優しく、それでも正確に一円単位で請求した。優作は貸した物を全てノートに書いていたのだ。それでも水島達はのらりくらりと誤魔化していたのだろうが、その内、優作が手作りの請求書を、あくまでもわかりやすいようにという優しさで、彼らの家に配ったものだから、親達の知るところとなり、彼らは全員バイトをするはめになった。

それもこれも、マリオカートの時の僕のように最初から「くれ」と言わなかったからである。また僕のように優作のルールがわかっていれば、今からでも借金分のお金を優作に「くれよ」と言い、それをそのまま優作に返すという手もあるのだが、水島達が優作のルールに気付いているはずもなく、彼らはただ恐怖し、急いで金を作り、完済して早く優作との縁を切ろうと必死に働いたそうだ。

波乱の中学生活ですら不変であった優作は、平穩

な高校生活の間ではもちろん変わるはずもなく、  
若<sup>じゅっかん</sup>干、裕福になったものの、それは自分が稼いだ  
お金が戻ってきただけの話である。

その間、僕はというと、この高校だったら安全だろうと、優作の観察もそこそこに、ボクシングを続け、あとはバイトをしていた。

そして三年生になり、流石に受験を優作に代わってもらわなくてもいいはず（きっと優作は「いいよ」と言うだろうが）それでも優作に勉強を見てもらって、無事に僕らは同じ大学に合格することが出来た。

#### 4

さて、ようやく大学生である。

僕は某大学の文学部に入り、優作は理系の小難しい学部に入ったので、僕らは学ぶべき教科も、場所も全く違い、唯一、同じ講義が生物だけとなった。なので、その講義中に「後でノート写させて」とお

遊戯みたいな頼み事をして僕は眠ったり、あとは時間が合えば食堂で昼食を食べたりする程度の間柄で落ち着いていた。

大学ともなるといろんな奴がいた。それは別に哲学科の大橋くんのように頑かたくなに豆腐とかヨーグルトといった白くて柔らかい物しか食べないといった奴がいるということではなくて、優作に対する接し方がいろいろ増えたという意味である。

小学生からの知り合いはたぶん僕だけだけれど、中学からの知り合い、高校からの知り合い、バイトの知り合い、大学からの知り合いと、知り合ってからの年数がみんなバラバラなのだ。それにより優作に対する感情もいろいろで、好感から始まり、驚愕、慣れ、蔑さげすみ、恐怖、無視、崇拜、といろんな段階の人達が入り交じる状態となった。

それでも代返事件や、ある授業のレポートが全部優作の筆跡だったり、よくよく確認すると学内のサークルの半数以上に在籍していたりという伝説から、

優作に三回連続で頼み事をするとな身内が死ぬやら、優作を教主とした新興宗教が学内に広まっているやら、優作はみんなに少しずつ貸しを作っていて、それが一定量に達すると地球が減滅する、などといった半ば都市伝説のような噂が広がり、ちょっとした有名な人と化していた。だからか、何も知らず虐めていた奴などから後で真剣に相談されたこともあった。「あのさ、優作ってもしかして、復讐する機会をうかがっているんじゃないかな？」

そう相談する相手の顔が蒼白く震えているのを見て、僕は吹き出してしまふ。

「だって、優作って高校生の人に貸した金を取り立てて、クラスメイトが見る中で首吊り自殺に追い込んだって。まあ、それは運良く紐を支える蛍光灯が落ちてきて助かったけど、その後、優作はそいつらをぶん殴って、蛍光灯の破片でザクザクと切り刻んだって話じゃないか」

話が混じっている上に過剰にデフォルメされてい

る。

「きつと、いつか、あいつのあの優しさの反動がやってくると思うんだ。地震とか温暖化とか隕石とか

……」

「いや、それともう、優作関係なくない？」

「そうだけど。でも、だったら、あいつ自身が何らかの形で、世界を滅ぼしにかかると思うよ、絶対。

だって、おかしいもん、あんな、いい奴いるなんて、絶対」

そう言っただけはぶると大きく身震いしていた。

僕は「考えすぎだつて」と言っただけを慰めてやった。そんなに心配だったら優作に言えばいい。

「世界を滅ぼさないでね」と。そうすれば「いいよ」と言ってくれるはずである。

そう彼に言っただけ。

すると彼は「そうか」と言っただけで帰って行った。アホである。

このように大学生になっても優作は変わらなかった。

た。変わるのには、このアホのように、いつだって周りの人間なのだ。

優作が「変わらない」ことが、

少しずつ周りを狂わせていく――

続きは『Powers Selection - 新走 - 』で!!